

カントとミシュライエルマツヘル (承前)

勝部謙造

四

啓蒙思潮は其及ぶ處時代の人心を支配し、其齎す處の合理主義と功利的傾向との威力は恐ろしいものがあつた。此大勢を覆し新思潮の理想を確立するのは實に容易ならざる事業であつて大體に於ては我々が曩に宗教改革について述べた様な思想、其者の普及と爛熟とによつて内部からの崩壊を待つより外仕方のないものであつた。然しながら一思潮の爛熟崩壊は、必らず他面に於て其更生復活を意味するものである。古き思想の死灰から、新しい理想のフィニクスが新生命を以て産れ出づるのは文化發展の常諦である。啓蒙時代に於て此大使命を帯びて立つた改革家は、哲學では實にカント其人である。藝術界に於ては、カントと併べるのは或は當を得ないかも知れぬが、先づ指をレッシングに屈すべきであらう。レッシング及び彼の後

に起れる獨逸浪漫主義の人々に就いては、後段に至つて述ぶる處があらうから、こゝにはしばらく措いて置く。カントが其批評主義の利刃を揮つて、人間悟性の限界を明示して従來の合理的形而上學を粉碎し、神徳及び不滅なるウオルフ一派の三星も、悟性を導いて宗教の天地に入らしむべき光明をば缺いで居る事を證して、所謂自然神學の基礎を根柢より覆し、又道徳に於ては、善良なる意志を高調し、自律的法則に従ふ人格の絶對價値を確立して、啓蒙思潮の功利的道徳論をば一蹴し去つた事は人も知る如くである。

かくの如くカントは一面に於て破壊者であつた。彼の使命はキリストの所謂「地に刃を出す事であつて、彼の論敵モーゼス・メンデルズゾーンをして「總てを破壊するカント」と評せしめたのも、相當の理由のある事である。然しながら彼の批評哲學には、他方に於て新なる建設の一面があることを、或々は決して閑却してはならぬ。彼は「純粹理性批判」に於て一度否定し了つた道徳や宗教の世界をば「實踐理性批判」に於て更に廣く、更に深き基礎の上に建て直して居る。而して我々はそこに彼特有の偉大なる世界觀や人生觀を窺ふ事が出来るのである。吾人は今茲に彼の批評哲學の細論を紹介する意圖は持たないのであるが、彼の批評哲學の積極的歸結が、當時バル

びに於けるハルヌーター派の感情的宗教に堪え切れないで、奔つてハルレ大學の學窓に於て專心思索に耽つて居た若きシュライエルマツヘルに、どのやうな問題を提供したかといふ事を先づ以下に少し考へて見やうと思ふのである。

カントによれば我々の理性の使用は經驗界内に限らるべきものであつて、其限界は嚴重に守らねばならぬものである。然しながら事實に於て理性は其性質上決して經驗界のみに止まりて満足して居るものではない。所謂「制約されたものから順次其制約に進み行く事を完成しやうといふ願望」を本來具えて居るのである。この様な理性其物の要求からして、我々は經驗世界では到底實現し得ないところのある窮極概念に達する。これがカントの所謂「理念」^{イデア}といふのであつて、心靈、世界及び神といふ三種があり、凡ての形而上學の根本概念となつて居るものである。

然るにこの三種の理念の内、第一の心靈といふのは、實に我々の認識主觀からして直ちに實體としての「我」を論證するものであつて、畢竟純粹理性の論過から生じて來た概念に過ぎない。又第二の世界といふ概念には矛盾した命題が同時に立言せられ得ると云ふ所謂二律背反を伴ふといふ缺陷がある。第三の神といふ概念については、從來の有神論には、實體論的、宇宙論的、又物理神學的證明方法があるが、これ等

は皆それ／＼矛盾を含んで居て充分でない。彼が實體論的證明の非を發いて、空想の百ターレルと懐の中に實際持つて居る百ターレルとは全く違ふといふた語等は哲學の入門者と雖よく知つて居る處である。つまり孰れも我々の經驗に入つて來ないものであるのに、それを理性によつて知らうといふのは無理であつて、結局この三つの理念は我々の學問の對象たる事は全然出來ないものである。故に學としての形而上學は勢／＼に倒れざるを得ないわけである。

今この第二の場合即ち純粹理性の二律背反（一）といふのは四通りに分けて論せられて居るのであるが、其第三番目の命題は自由と必然といふ事に就いてある。即ち定立としては「世界には自由による原因あり」と云ひ得るし、又反定立には「自由なるものなし、一切自然なり」とも云ふ事が出來るのである。（二）この様に一方に自由を認め得ると同時に、他方又必然をも認めなければならぬのは、所謂コペルニクスの轉回によつて彼が時間、空間、範疇の本質を主觀の形式に求め、自然を以て意識の所生となし必然的因果の行はるゝ範圍を現象界に限つたといふ事は、同時に物自體の世界に於て自由の行はれ得べきを證左したわけであるからである。茲に於てか一方に於て時空因果の如き概念が彼の哲學に於て重要な役目を務むると同時に、他の反面に於

て自由といふ概念が其思想の中心點になり得るのである。

更に轉じて實踐理性の場合になると自由の概念は彼の議論の出發點になつて居る。彼自身も「自由の概念はその實在性が實踐理性の必然的法則によつて證明せられる限り純粹理性の理論理性さへの全體系の要石をなす」⁽²⁾のであると云ふて居るのを見て分る。

(1) Kant: Prolegomena (Reklams Ausgabe), S. 124 譯文天野采木譯本による。

(2) Kant: Kritik der praktischen Vernunft (R. A.) Vorrede. 譯文宮本波多野譯本による。

五

カントの道德論は先づ我々の道德的意識の分析から初まつて居る。彼の時代はこの種の問題の考察に入るのには、道德的行爲の判断といふ形式と、又義務の概念といふ形式との二つの門戸があつた。義務といふ點から這入るのはウォルフ等以來の常套であり、又道德的判断の研究といふ風のやり方は蓋し英國學者達の創見によるものであらう。⁽³⁾ 道德的判断の問題に於てはカントは行爲の結果をば全然顧慮せ

ないで、所謂善意志の絶対價値を主張した。「理解力、機智、判斷力其他名稱の如何を問はず精神上の種々なる才能、或は勇氣、果斷、堅忍、不拔等の氣質の諸性質は、多くの點より見て善きもの、且つ願はしきものなることは疑はない。然し斯様な自然の賜物も、之を使用すべきものが意志であり、従つて意志の特殊の性質が性格と呼ばるゝものなる以上、意志にして若し善ならざる時には、却つて此上もなき惡となり、害となるに至る」⁽⁶⁾ものであるといふのである。幸福といふやうなことも同様に此善意志の如く無際涯に善なるものと見做される事は出来ぬ。

更に又他の一方の門戸即ち義務といふ事柄からも同じい事を立證する事が出来る。蓋し善惡の判斷は人によつて其黑白を異にせず、其普遍的必然的なものであるのは何人も認むる處である。即ちこれはカントの所謂先天綜合判斷の一種であつて、道德律の確實性は實にこの點から來て居るのである。而して義務といふのはこの様な道德律の要求する處を我々が意識したものを云ふのである。カントの語で云へば義務は法則に對する畏敬よりする行爲の必然性である。⁽⁷⁾即ち我々は義務といふ道德現象に於ては善意志の場合とは全く反對に、一寸考へると外部から我々に加へられる二種の壓迫の様にも感せられるものである。然しながら實際はそう

ではなくて、義務は道德律の權威に對して我々の内より出づる畏敬の念に其基礎を有して居るもので、行爲から生ずる結果といふ風な事とは全く關係のないものである。

所がこの道德律なるものは自然界を支配して居る實在 *Sein* 必然 *Müssen* の法則とは其性質を異にし、常に反對する傾向を豫想せる當爲 *Sollen* の法則である。即ち道德律は我々に對して常に命令の形を取て現はれるもので、而かも經驗に基礎を有する假言命令のやうなものではなくて、絶對無上の定言命令として現はれるものである。つまり道德の基礎は幸福とか利益とかいふ經驗的の事にあるのではなくて、理性それ自身にあるものである。この事實は一面道德は他律的ではなくて自律的であるといふ事を語るものである。即ちちそれ自身が目的であつて、何等他の手段となるのではないから、そこに絶對至上の價值を藏して居るのである。人格の尊嚴といふ事もこゝから生じて來るのである。而してこの様な自律的意志は一切の活動の原因であり、同時に他の何物もの結果ではなくて全く自由なものである。茲に於てか問題は再び自由といふ事に返つて來る。かゝる自由が必然的因果の支配をうけて居る現象界に存せないのは我々が前節に述べた通りであつて、これは自然法則

の手の届かない睿知界に於て初めて認める事が出来るものである。これ純粹理性の理論的使用に於て、自由の問題が二律背反に陥るを免れざる所以である。然しながら道德の世界に於ては、道德律が我々に認識せられ得るためには是非とも此自由といふ事を許さねばならぬ。即ちさきに純粹理性に於て許し能はざりし自由が、茲に實踐理性の要請として確立せられた譯である。

更に又道德に關しては昔から至善 *Summum bonum* といふ概念がある。或は快樂或は健康或は富貴とかいふ事柄は我々人間の望む處の善であり、これ等の色々の善事を包括的に考へたものが至善である。其内容については色々に考へられるが、結局幸福といふ事が誰人に取つても最も望ましい至善の様に考へられる。カントは此至善の議論からして進んで實踐理性の第二、第三の要請を確立して居る。即ち元來我々の經驗世界に於ては道德と幸福との合致は殆ど不可能である。徳ある人にして不幸に苦しむものは世間に多々ある。それで不幸にして現世に於て徳を行ひながらも幸福を得る能はざりし人々のために、死後の生命、靈魂の不滅を望むのが我々の人情である。又此世はもとより、未來生活に於て道德的秩序を維持し、福徳の合致を保證すべき神なるものを望むのも又人情である。依つて心靈及び神といふ第二、

第三の要請が實踐理性によつて確立せられるわけになつたのである。

- (1) Butler: The Analogy of Religion: Natural and Revealed 等が此根本思想の先驅ならん。
- (2) Kant, Grundlegung zu Metaphysik der Sitten S. 21 譯文藤原安部譯本による。
- (3) ditto S. 20

六

シュライエルマッヘルがカントを批評して居る最初の文章は、彼がハルレ大學在學時代に稿を起したものであらうと想像されて居る「至善に就いて」⁽⁶⁾といふ未定稿の小篇である。蓋し學術的思想家は天才藝術家等とは多少其趣を異にし、其成るや決して一日にして成るものではない。シュライエルマッヘルの如きもバルビ時代からランツバーク時代に至るまで實に拾年の間、絶えずカント哲學の研究に没頭して居たのは彼の書翰集が示して居る處である。實際彼の天分はカントが哲學に於て試みた大轉機を宗教の畑に於て試みる事にあつた。カントが理性の批評家であつたと同じ意味に於て、シュライエルマッヘルは感情の批評家であつたと云ふてもよろしい位であ

るから、批評哲學の新聲が當時の彼に取つて、如何に快き驚異であつたかは想像するに難くない。然しながら我々は此時代からして既に後年の *Reden* や *Morologen* の著者の面影を認める事が出来る。彼はカント哲學の盲目的讚美者たるにはあまりに性格を異にして居た。初めからして彼はカントの批評家を以て任じた、而かも其批評たるや外面的考察を以て満足せず、彼一流の内在的批評法を用ひて居る。

「至善に就いて」の小篇に於て彼は、先づカントの福徳合致論に批評の刃を向けて居る。彼によれば、元來道德律なるものはカントも認めて居る様に先天綜合判斷たるを要するが故に、經驗的な欲求力といふやうなものを道德の動機とすることは一切避けねばならぬ。古來道德の動機とせらるゝものを綜合的に至善といふ名で考へられ來つて居るが、此至善なるものはたとひ我々の生活理想に對して如何なる意義を有するにしても、道德行爲の動機となる事は出来ない。少くとも此至善の概念と幸福の概念とを混同して居る間はさうである。もし至善なる概念を道德の世界に保持しやうといふならば、どうしても幸福といふ事と嚴密に區別せねばならぬ。蓋し至善なるものは本來道德的行爲の目的ではなくて、道德律に従つて行はれた行爲の結果の總稱である。これを譬ふれば道德律は代數學の函數のやうなもので、至善

はこの函數を表はす曲線のやうなものである。カントの失敗は元來統制原理に過ぎざる至善概念をば誤て構成原理と考へた事から來て居る。此考へはシュライエルマツヘルが在來倫理説の批評に於て更に詳述して居るものであり、又後年圓熟して彼の倫理説の根柢となつたものである。

これより更に進みて彼はカント哲學の大歸結、即ち實踐理性の三要請に對して批評を試みて居る。彼から見れば此至善の思想が直ちに神や不滅やに對する我々の信念に基礎附けをするものであるとは云へぬ。感覺界に於ける實踐理性の此誇大な理念は、我々の實際生活に於て理論理性の誇大な理念を設定するといふ事以外に何等の價値もないものである。而して此理念たる捕捉し難きものであつて、經驗界に於て直接に實現することの出來ないものである。カントは至善の概念を福徳合致の考へに結びつけて、これを實現しやうといふ無制約的要求より直ちに神及び不滅の理念に導いて居る。然し至善と幸福とを分離區別すべきは前に述べた通りであるから、このカントの歸結をば次の如くに改める必要がある。即ち無限の發展をなす至完の徳は、時間の制約を脱れて此無限の發展の全線を一目に見て取る事の出來る者のみに現はれる事が出來る。此故に若し一方に我々の理性が無制約的善の

實現を要求して居るならば、他方に必らず此無限の發展の全線が一目に現はれ得る神の眼といふものが存在して居なければならぬ筈である。⁽³⁾カントの誤はこゝに幸福の概念を移入した事である。實際彼の「強度、持續、分量に於ての最高の幸福」⁽⁴⁾と云つたやうな概念はカントの議論を明な自家撞着に導いて居る。

カントは又感性界に於て合致し得ざる福徳兩者が、睿知界に於て合一する事を要請して居るのであるが、これは又我々を次の様な「デレムマ」に導かざるを得ない。即ち感性界の何物か、未だ我々に附着して居る間は、道徳律の命令が我々の欲求力の自然法となり、所謂己れの欲する處に従つて矩を超えずといふ事は望む事が出来ぬ。然るに若し我々が感性界から全然解放せられるならば、これと共に我々の幸福に對する欲求は消え失せてしまふ筈である。

以上が「シユライエルマツヘル」の「至善に就いて」なる小篇の要旨である。これによつて彼はカントの福徳合致の要請からして、不滅神の理念を確立しやうといふ試みに對して、不満であつたのを示して居る。これが先づ彼が批評哲學の積極的歸結に對して揚げた第一聲である。(未完)

- (1) Schliermacher : Philosophische Rhapsodien, Ite Abhandlung. Ueber das höchst Gut. (Denkmale der inner Schliermachers.) s. 6 ff.
- (2) dito s. 12
- (3) Dilthey : Leben Schliermachers s. 133
- (4) Kant : Kritik der reinen Vernunft. Methodendehre s. 66